

第二十三回熊本支部大会報告

支部長 河野順子 (熊本大学)

第二十三回日本国語教育学会熊本支部大会を今年も十二月二十三日に熊本大学教育学部附属小学校において開催いたしました。翌日は終業式という学校も多くある中、午前中に三百人を超える先生方にご参加いただき、さらに午後の鶴田清司氏の講演には三百五十名あまりの先生方にご参加いただき、盛会裏に終えることができました。

午前中の授業研究会では、教師になって六年目の熊本県天草市立湯島小学校の原慧美香先生と河野の共同研究による「二十一世紀型学び」の授業提案を行いました。附属小学校の四年生を相手に、「わたしの『ゆめのロボット』』『着るロボット』を作る」(東京書籍)を用いた「批評読みとその交流」の提案です。

具体的には、昨年度まで使用されていた教科書本文の「まとめ」を批評読みするという学びを展開しました。学習者の主体的な批評読みを実現するために、本教材と出会う前に、「どろぶつの赤ちゃん」(光村図書)、「流水の役わり」(大阪書籍)という教材を用いて、本

文中の表現や論理展開を根拠にして、各自が「まとめ」の文章を書き、それに納得できるかできないかを意見交流するという事前学習(二時間)を河野が行いました。そして、それを受けて原先生が、本教材の『着るロボット』を作る」を用いて、空欄にしておいた結論部分を子どもたちに書いてもらい、そのあとで筆者の結論部分に出会わせて、筆者の結論部分に納得できるかどうかという「批評読みとその交流」を展開しました。

子どもたちが既習教材での学びを経て、主体的に意見を述べている姿に、参観者である私たちも引き込まれ、一緒に考えていくことのできる提案性のある授業となりました。

授業検討会では河野と原先生との対話を中核に、多くの先生方から積極的かつ建設的な意見が多く出され、あつというまに終了時間となりました。最後に兵庫教育大学名誉教授の中刈正堯先生のミニ講演へと続き、充実した授業検討会となりました。

午後の分科会では、今年が学生たちによる第一分科会の時間をずらして開催したため、多くの先生方にご参加いただくことができました。私は劇化を授業でよく取り入れるのですが、このような理論が背景にあったのですね。

理論を知ると何のために劇化をするのかがよくわかり、私も授業に効果的に取り入れることができると思いました」といったご意見もいただき、学生たちが理論と実践の統合の重要性を新たに確認することができました。他の分科会では、熊本県のスーパーティーチャーのベテランの先生から教師になって三年、四年目という若手の先生方まで、願いを込めた発表をしてくださいました。ご参加いただきました先生方から、「今年の会は若手の先生の頑張りが伝わり、元気をもらいました」といった声をたくさんいただきました。

最後の全体講演は、以前より要望が多かった鶴田先生にお願いしました。「文学教材の特質に応じた授業のデザイン」というテーマでの一時間半のお話でしたが、途中で模擬授業風に進めてくださったりして、参加者がこれからの文学の授業づくりを具体的にイメージすることができるようでした。「自分のワンパターンの授業を反省しました。アクティブラーニングを実現するためにも、教師がどの教材でどのような力をつけるのか、それぞれの教材に応じた学びの方法をしっかりと考えていくことが大切ですね」といった感想をたくさんいただきました。